

アイヌと奄美大島以南の 女人に伝わる入れ墨の風習



北と南に残った「入れ墨」の同一文化

かつて、北海道のアイヌ(含む樺太・北千島)は「書く・彫刻する」を意味したシヌイエ、ヌエ、ウヌイパと呼び、また鹿児島県・喜界島を北限とした奄美大島以南(南西諸島)の島民はハジチ・パジチ・ハヅキなどと呼ぶ両者に共通した「入れ墨」の風習があった。

なぜ入れ墨の風習は途絶えてしまったのだろうか？

康熙32年(1693年)5月に琉球国王尚貞は「刺青禁止令」を布告(根絶には至らず)、その後明治初期には野蛮な習俗として本州・四国・九州を中心に警察の取締りと罰則を伴う入れ墨禁止令が出され、続いて奄美・沖縄にもそれは及んだ。

北海道では、1871年5月開拓使によってアイヌ民族の風習(入れ墨、耳飾りや家送りの儀式など)を禁ずる通達が出され、太陽神オキクルミの時代にまで遡ると推測される伝統風習で

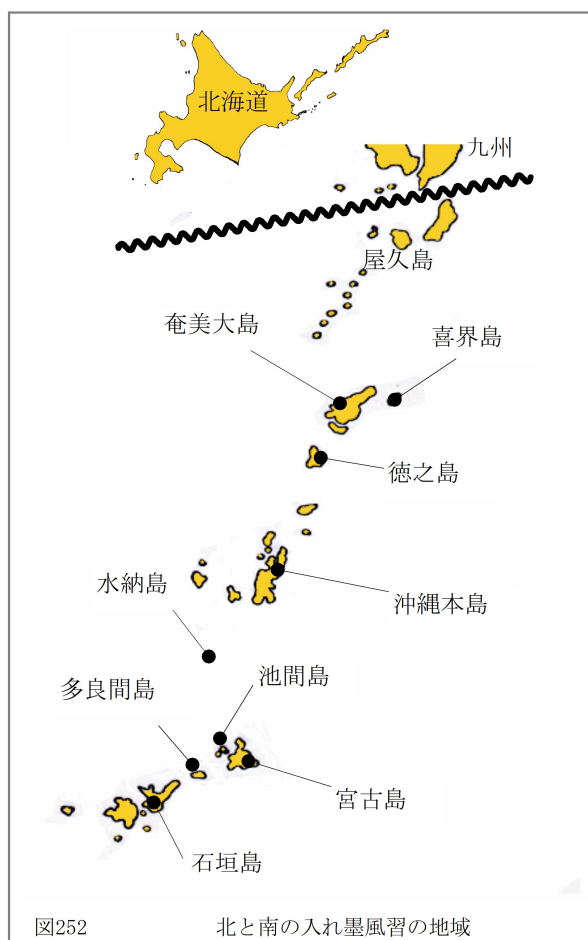


図252

北と南の入れ墨風習の地域

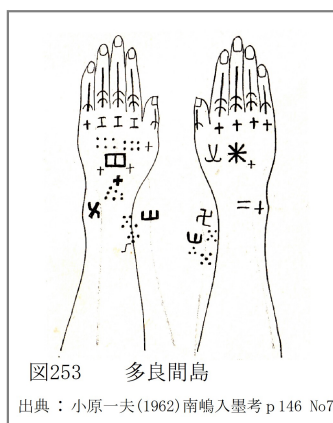


図253 多良間島

出典：小原一夫(1962)南嶋入墨考 p 146 No7

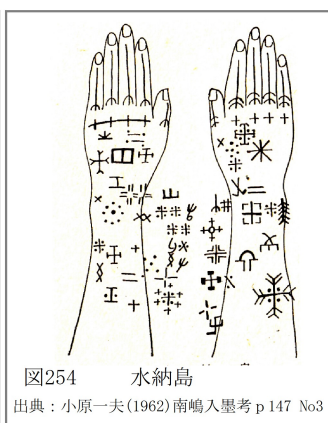


図254 水納島

出典：小原一夫(1962)南嶋入墨考 p 147 No3

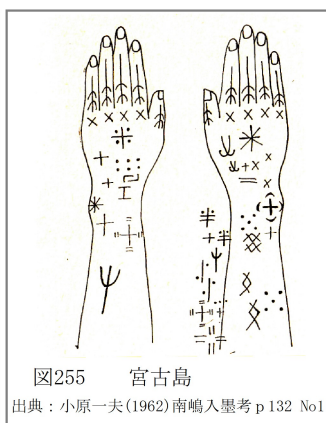


図255 宮古島

出典：小原一夫(1962)南嶋入墨考 p 132 No1

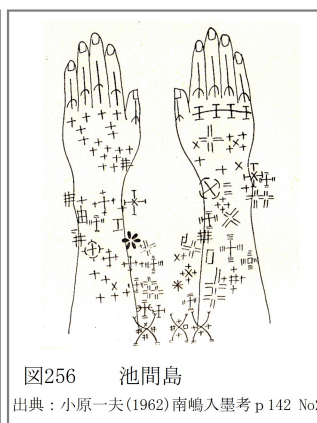


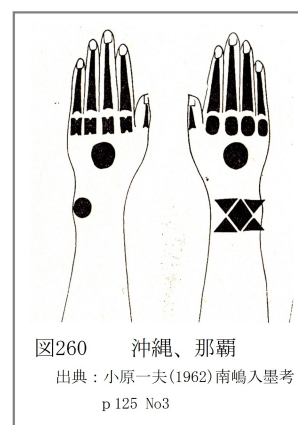
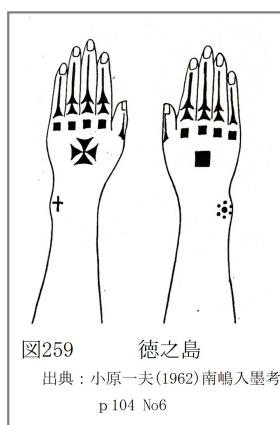
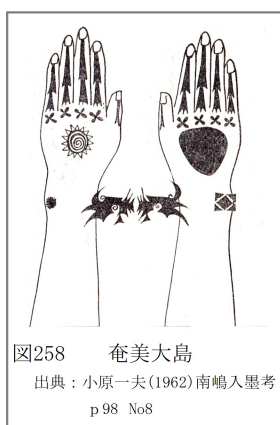
図256 池間島

出典：小原一夫(1962)南嶋入墨考 p 142 No2

表16

アイヌの入れ墨と南島のハジチの特徴

	アイヌの入れ墨	南島のハジチ
女性	[施術箇所] 手甲、腕、手首、口周辺、眉間 [年齢] 5～6歳から入れ始め段階を経て20歳頃までに出来上がるようにする [模様の主な特徴] ・ 左右非対称 ・ 手甲：山形・三角形・菱形・菱形井形・×形等 ・ 腕：並行線・×形・電光形・入字形等	[施術箇所] 手甲、腕、手首、一部の島では足や肩 [年齢] 7歳前後から入れ始め15.6歳で必ず両手に入れる [模様の主な特徴] ・ 左右非対称 ・ 手甲：円文・三角形・菱形・渦巻等 (奄美大島/徳之島/沖縄/沖伊良部島/石垣島) ・ ×形・＊形・三又鉾形等 (喜界島/宮古島/伊良部島/池間島/多良間島/水納島) ・ 手首：三角形・菱形・渦巻等 (喜界島/奄美大島/徳之島/沖縄/沖伊良部島/与論島) ・ ×形・＊形等 (宮古島/伊良部島/池間島/多良間島/水納島)
女性の 施術 目的	・ 成女儀式・婚姻と関係(結婚後にも施術。結婚とは無関係との説もあり) ・ 入れ墨がないと死後苦勞する(入れ墨をしないうちに亡くなったものには模様を描いて埋葬) ・ 治療目的 ・ 和人に連れ去られたりせぬよう身を守るため ・ 集団、家筋などの識別	・ 成女儀式・婚姻と関係(結婚後にも施術) ・ 入れ墨がないと後世に行けない(入れ墨をしないうちに亡くなったものには模様を描いて埋葬) ・ 治療目的 ・ 大和・薩摩や外国に連れ去られたりせぬよう身を守るため
起源・ 伝説等	・ 飢饉を救ってくれたコロボックル(堅穴に住む人の意)の女性の入れ墨を真似て始めた ・ 文化英雄神オキクルミカムイの姉、妻に入れ墨が施されており、アイヌ達に伝えた ・ 神聖なアイオイナと天から降りてきた彼の妹が入れ墨をしており、彼女が立ち去る前にアイヌに慣習を紹介した ・ オイナカムイの妻が病気にかかったとき、妻の悪い血をとるために唇に針を刺し病気を癒した言い伝えから入れ墨をするようになった	・ 入れ墨を入れることにより、理不尽な災難を逃れた (沖縄本島・徳之島伊仙村面縄・八重山石垣伝説) ・ 航海中の災難から救ってくれた女性への恩を忘れぬため、その女性と同様に入れ墨を入れるようになった (八重山黒島伝説) ・ 入れ墨についての歌謡 (奄美大島・徳之島・沖伊良部島・沖縄那覇) ・ 女は知恵があり過ぎて鬼になるので悪心を取り除くため入れ墨をする (喜界島)
男性	・ 左手の親指と人差し指の間に×か、左肩のあたりにのいずれかを入れる (日高アイヌ) ・ 唇傍 (小樽アイヌ) ・ 右手 (弓の上達のため)	・ ひじの近く・腕に三又鉾の文様 (沖縄本島糸満漁夫) ・ 腕の内側に K・ㄣ・ㄣ (沖縄本島喜手納町) ・ 左腕に V (沖縄本島読谷村)

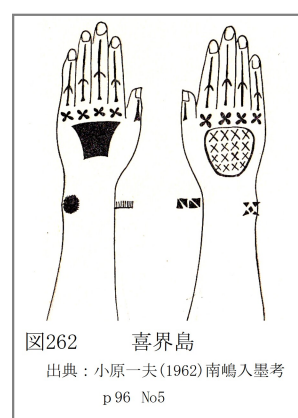


ある入れ墨が途絶えてしまったのである。

これまでの研究や調査報告書等をもとに、日本の北(アイヌ)と奄美大島以南の島々(以下南島)に色濃く残っていた入れ墨の伝統風習について整理するといくつかの類似点が見えてきた。

○女性

施術箇所は、アイヌ・南島共通して手甲・腕・手首に施術し、アイヌは口周辺や眉間、南島では一部で足や肩へも施術された。



幼少期から入れ始め段階を経て施術し、文様は左右非対称に入れていることも共通している。

施術目的に関しては、成女儀式(通過儀礼)や

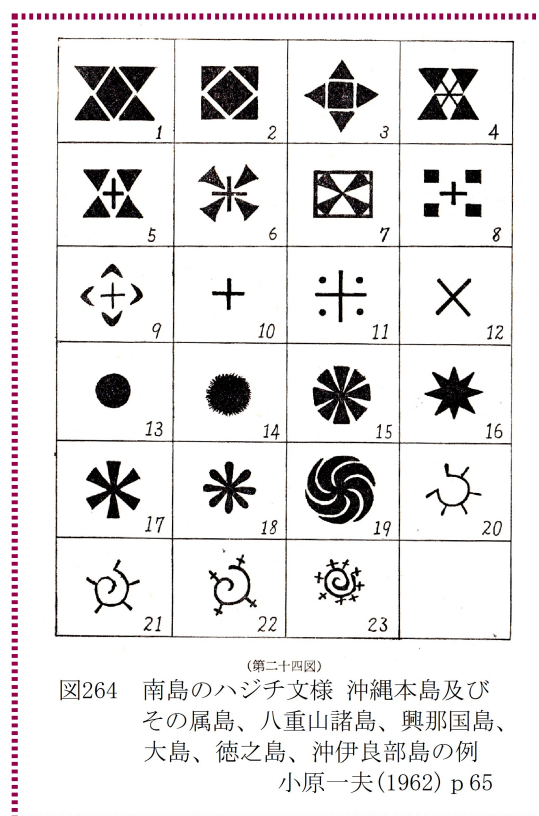
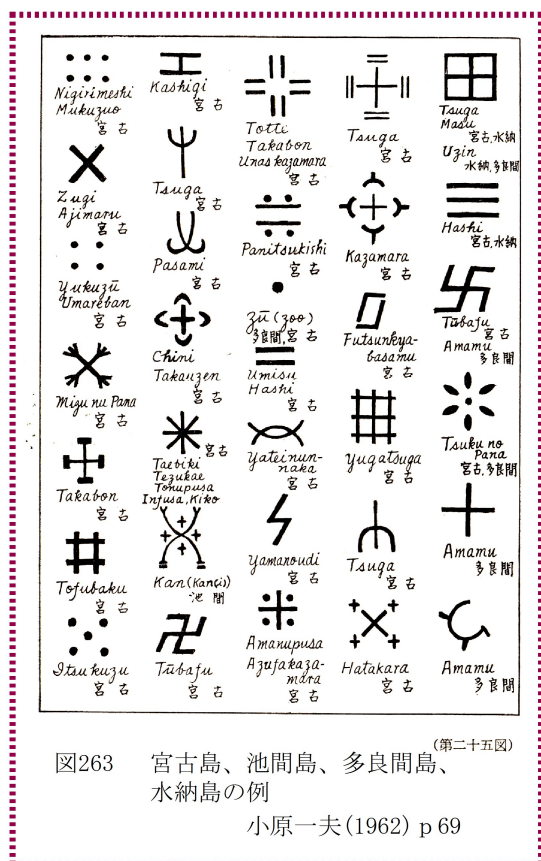




図265 アイヌの祖印
杉山寿栄男(1992)「アイヌ文様」
第六十六図版 祖印各種
北海道出版企画センター

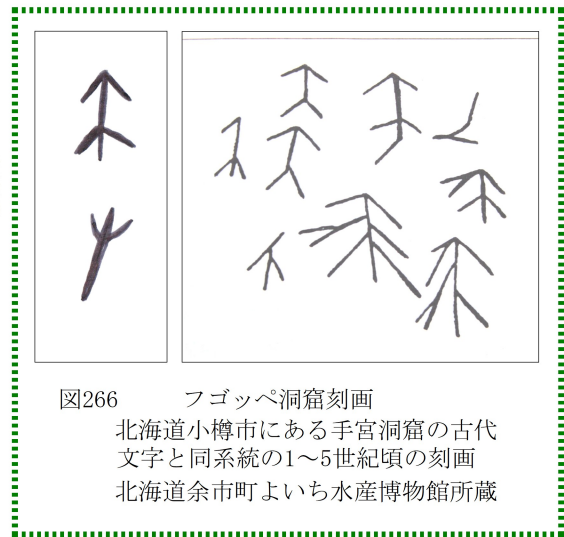
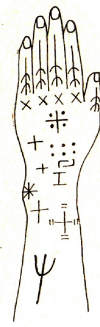


図266 フゴッペ洞窟刻画
北海道小樽市にある手宮洞窟の古代
文字と同系統の1～5世紀頃の刻画
北海道余市町よいち水産博物館所蔵

治療目的、ヤマトに代表される侵略者から身を守るため等ほぼ一致している。

施術文様は、アイヌは直線を用いて菱形や三角形、×形等が施されているのに対して、南島では大きく二つの系統に分かれている。

奄美大島・沖縄本島・喜界島・徳之島・石垣島の文様は、アイヌの入れ墨文様に非常に酷似した三角形や菱形を組み合わせた文様が多く見受けられる。

宮古島・水納島・多良間島・池間島では細線で文様が施されており、アイヌの服飾文様や系図の区別をした祖印、そして1～5世紀ころの古代文字といわれる国指定史跡である北海道の岩面刻画(余市町・フゴッペ洞窟及び小樽

市・手宮洞窟)などとも類似性がみられる。

アイヌ民族には特有の服飾文様があり、その施された文様には特別な意味があるというハジチの文様はそれぞれ名称があり、文様自体に何らかの意味があったことが窺え、織物や家合との関連も指摘されている。

○男性

北のアイヌも南の島民でも女性の入れ墨が知られている。

それに対して男性は入れ墨を施さないものと考えられていたが、文様や施術個所に違いがあり事例は少ないが男性にも入れ墨の風習が存在した記録が残っている。

✂ 他地域での入れ墨の記録 ✂

◆九州 ①『魏志倭人伝』：倭(日本)の水人男子は大人も子供も顔や体に入れ墨を施していた記録。

『魏志倭人伝』

〈原文〉男子無大小 皆黥面文身 自古以来 其使詣中国 皆自稱大夫。夏后少康之子封於会稽、断髮文身以避蛟龍之害。今倭水人好沈没捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽。後稍以為飾、諸国文身各異、或左或右、或大或小、尊卑有差。

〈訳〉「(倭の地の)男子は成人・子ども(あるいは、身分の上下)の区別なく、みんな顔と顔面や身体に入れ墨をしている。古くからずっと、倭国の使者は中国にやって来て、みんな(呉の太伯の後裔と自任しているの)で大丈夫だと自称している。それは夏後の少康の子が会稽に(王として)封ぜ

られたとき、みずから髪を切って身体に入れ墨をし、(身をもってそれで)蛟龍の害を避け(るように教え)た。(だからそれに倣って)今の倭の海士たちは、巧みに水に潜って魚や蛤を捕らえ、身体に入れ墨を施してそれによって大きな魚(鮫など)や水鳥(海鷗など)の襲撃を厭えている。(ほんらいはそうだが)、その後は、しだいに飾りとなっている。諸国の入れ墨はそれぞれ異なっていて、ある者は右に、ある者は大きく、ある者は小さく施している。尊いか卑いかで、差がつけられている。」

松尾光(2014)「現代語訳 魏志倭人伝」

魏志倭人伝には、末盧(まつろ)国住民は海人として魚や鰻(あわび)を捕っていた記録

があり、末盧国は九州北部の佐賀県や長崎県佐世保・福岡県と推定されている。

②『古事記』：大久米命は黥利目(目の周辺に入墨を施すこと)であった記録。

『古事記』(中つ巻神武天皇)
〈原文〉爾大久米命以天皇之命詔其伊須氣余理比賣之時見其大久米命黥利目而思奇歌曰
〈訳〉「ここで大久米命が天皇の命令によって、その言葉を伊須氣余理比売に伝えると、伊須

氣余理比売は大久米命が目じりに入れ墨をしていて、目が裂けているように見えたので、それを奇妙に思っ
て次の歌を詠みました。」

竹田恒泰(2011)「現代語古事記」

久米の発祥地 北九州糸島半島(福岡県糸島郡志摩町大字野北字久米)、熊本県人吉地

町久米)、鹿児島県。人吉盆地は球磨の中核、のちの熊襲の地。

◆大阪府『日本書紀』：河内飼部に入墨が入っていた記録。(古墳時代家畜鳥獣の飼育者に入墨風習)

『日本書紀』(履中天皇5年9月18日条)
〈原文〉秋九月乙酉朔壬寅、天皇狩于淡路嶋。是日、河内飼部等從駕執轡。先是、飼部之黥皆未差。
〈訳〉「九月十八日に、天皇は淡路島で狩猟をなさ

れた。この日に河内の飼部部等がお伴をして、馬の手綱をとった。これより先、飼部の入れ墨がまだ治っ
ていなかった。」

宮澤豊穂(2009)「日本書紀全訳」

5世紀代に河内国(大阪府)一帯に、馬飼集団の定着があったとされている。

大東市、屋根川市の南東部)一帯。

河内馬飼の拠地は讃良郡(大阪府四條畷市、

※飼部 馬の調教・飼育や肥料の献貢納などに従事した部曲。

◆京都『古事記』：猪飼の黥面(入墨をした顔)老人の記録。

『古事記』(安康記)
〈原文〉故到山代苅羽井食御粮之時 面黥老人來奪其粮 爾其二王言 不惜粮然汝者誰人 答曰 我者山代之猪甘也
〈訳〉「二人が山城の苅羽井(木津川市)に着いて、持参の弁当を出して一休みしようとした時に、顔面に入れ墨をした老人が来て、その食べ物を

引ったくって持って行った。そこで二人の王子は急ぎ足ですたすた逃げる老人に、大きな声で、「食べ物
は惜しくない。しかし、あなたは誰か」と尋ねた。すると老人は離れた所で振り返って、「私は山代の猪飼だ。」と答えた。」

武光誠(2012)「歴史書古事記全訳」

山代は山城国(現京都府南部地域)

◆関東・東北及び北方『日本書紀』：日高見国の蝦夷の男女が文身(体に入墨を施すこと)していた記録。

『日本書紀』(景行天皇二十七年二月の条)
〈原文〉東夷之中。有日高見國。其國人。男女並椎結文身。爲人勇悍、是總曰蝦夷。
〈訳〉「東方の辺境の中に、日高見国があります。

その国の人々は、男女ともに髪を椎のような形に結い、身に入れ墨をしており、人となりはたいへん勇猛です。これを蝦夷と申します。」

宮澤豊穂(2009)「日本書紀全訳」

日高見国は、関東・東北の広い地域。常陸国風土記では茨城県はかつて日高見国であった

と記録されている。蝦夷は関東・東北地方及び北方に住む人々をさす。

※阿曇目飼部 『日本書紀』(履中天皇元年四月丁酉条)阿曇連浜子が墨刑に処せられ「阿曇目」と呼ばれたとする話がある。

阿曇部の人々に元々入墨風習があったことを説明する話であるとの見方もある。
阿曇氏の起源は北部九州。

履中以降において入れ墨の風習は廃れていったようであるが、その後犯罪者に対する刑罰として復活した経緯が認められる。

アイヌの入れ墨と南島のハジチは同様の目的を持った風習である。

距離は離れていても同一の文化指導者である太陽神オキクルミの介在が指摘され、結果的に両者は「入れ墨」の行為を通じて「人間性の復活」の証である宇宙へと志向したに違いないと考えられたのである。

また時代が経過するにつれて入れ墨はヤマトから身を守るべく必要にかられてそれを施してもいることから、渡来人とは一線を画した南北の土着の民族に共通した風習であったと見るべきであろう。

これは、DNA研究において判明しているアイヌ人とオキナワ人の遺伝的共通性を見事に表しており、「藁算」などの他の共通した文化も両者には認められるのである。

おそらく、ヤマトの武力侵略の結果として “

入れ墨の文化 “は両極端へと追いやられたのであった。

尚、南島のハジチに関しては、小原一夫氏が現地に赴き取材採集した貴重な資料である「南嶋入墨考」(1962)から引用させていただいた。

次号では、アイヌがかって日本列島に居住していたことの確固たるエビデンスの集大成として、以下の⑩～⑫のテーマについて多様な観点から考察する。

⑩ 形質人類学における「縄文人」「渡来系弥生人」「古墳時代人」「続縄文人」の各人骨と「アイヌ人骨」との比較研究は何を示唆したか。

⑪ 分子人類学における「縄文人」「本土日本人(ヤマト人)」「沖縄人(琉球人)」「アイヌ」及び列島周辺の人々のゲノム研究は何を示唆したか。

⑫ 日本列島各地に散在するアイヌ語地名について。 つづく

アイヌ民族の伝承

○アイヌの民話集

第二話 文身(いれずみ)のはじまり

人間の始祖オイナカムイ(オキクルミカムイ)の妻が、ある日重い病気にかかったとき、日の神がいうには、「女は男より悪い血が多い。そのためにま病気になったのだから、悪い血をとりさると病気が癒るだろう。」と教えた。そこでオイナカムイは、さっそく

日の神のいう通りに、妻の悪い血をとるため、その唇を針で刺して血を流した。
その傷あとには、火の神が作ってくれた鍋墨と灰を塗ったところ、病気も傷口もすっかりなおってしまった。
この言い伝えからアイヌの人々は、唇や手に入墨をするようになったという。

出典：更科源蔵著 風光社